

電子版

西日本支部通信

第29号（通巻129号）

Nishi-Nihon Branch Newsletter No. 29
The Musicological Society of Japan

発行：日本音楽学会西日本支部
〒662-8501

兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155
関西学院大学文学部美学研究室気付

E-Mail: msjwest00@gmail.com

TEL: 0798 54-6212

巻頭言

支部長 小石 かつら

例年に増して暑い夏を過ごしています。早いもので、2026 年度も前半を終えようとしております。

西日本支部では、6 月と 7 月に定例研究会を開催いたしました。両回とも、卒業論文、修士論文、博士論文の発表に加え、一般の研究発表も行われました。ご参加くださったみなさま、また発表に関わってくださったみなさまに御礼申し上げます。それぞれの方が対象とする時代や地域、研究方法はさまざまで、多彩な内容となりました。本号では、その様子を詳しくご紹介していますので、ご覧いただければ幸いです。

また、6 月、7 月とも発表希望者が大変多く、秋以降の例会を待っていただいている方もあります。支部の例会でこれほど多くの発表希望をいただけることを、ありがたく思っております。

さまざまな研究に触れ、意見を交わすことのできる機会を、今後も大切にしていきたいと思っております。支部の活動について、ご意見、ご感想など、小さなことでもお寄せいただければ幸いです。みなさまのお力添えをいただきながら、これからも支部の活動を続けていきたいと思っております。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

2026 年 9 月 3 日

□ 目 次 □

支部長 巻頭言	・ ・ ・ ・ 1
定例研究報告 西日本支部第68回（通算418回）定例研究会	・ ・ ・ ・ 3
＜修士論文発表＞	
1. 森本恵一（大阪大学） 関西のパイプオルガン受容における多様性 要旨：森本恵一 報告：松井典子	
＜博士論文発表＞	
2. 李雅心（神戸大学） 多文化影響下における青島での音楽活動と歴史的背景の考察——1938-1945を中心に 要旨：李雅心 報告：陳諾	
＜一般発表＞	
3. 藤田真優（京都大学） 歌の「イリュージョン」——エレヌ・ド・モンジュールの『フォルテ・ピアノの教育のための完全な教程』における美学的背景と手段 要旨：藤田真優 報告：松井典子	
定例研究報告 西日本支部第69回（通算419回）定例研究会	・ ・ ・ ・ 6
＜卒業論文発表＞	
1. 坂崎達哉・西田紘子（九州大学） 楽曲と演奏者の感情不一致が及ぼす聴取者の感情評価への影響 要旨：坂崎達哉・西田紘子 報告：高橋舞	
2. 齊田虎大（九州大学） 計算音楽学による日本を題材としたゲームの背景音楽の特徴分析 要旨：齊田虎大 報告：大瀧徹	
＜修士論文発表＞	
3. 田中晴野（九州大学大学院修了） 高千穂の夜神楽にみる自然観の現れ 要旨：田中晴野 報告：川崎瑞穂	
＜博士論文発表＞	
4. 梶大也（九州大学大学院修了） 戦後日本における山田耕筰の歴史的記憶——人物像と《赤とんぼ》を中心に 要旨：梶大也 報告：李惠平	
＜研究発表＞	
5. 梅林郁子（鹿児島大学） 旧制第七高等学校教師エルンスト・プツェルの音楽教育観とナチス・ドイツの音楽政策 要旨：梅林郁子 報告：田崎直美	
編集後記	・ ・ ・ ・ 11

□定例研究会報告□

■西日本支部 第 68 回（通算 418 回）定例研究会

日 時 : 2026 年 6 月 13 日（土）15:00-17:00
会 場 : 同志社女子大学今出川キャンパス 純正館 S308
例会担当 : 椎名亮輔（同志社女子大学）
司 会 : 椎名亮輔（同志社女子大学）
内 容 : 修士論文発表・博士論文発表・研究発表

修士論文発表

関西のパイプオルガン受容における多様性

森本恵一

発表者による要旨

森本恵一

1980 年代以降、多様な種類のパイプオルガンが関西において設置された。2025 年 1 月に提出した修士論文では、その多様性が 20 世紀初頭から築かれてきたパイプオルガンの受容体制に由来することの明示を試みた。日本におけるパイプオルガン受容は宗教や教育機関のネットワークに基づくコミュニティによって進められてきたが、関西ではそういったコミュニティ群の乱立により、コミュニティ間の情報流通が乏しくなっていた。これは、関西において設置されるパイプオルガンの種類や運用方法の不統一性に直結することとなった。本発表では、修士論文の第三章となる 1920 年代から 1940 年代にかけて関西で設置されたパイプオルガンを扱った部分を抜粋し、反省を踏まえつつ、今後の研究可能性の模索を行う。

レポーターによる報告

松井典子

本報告は、発表者の森本氏が 2024 年 3 月に提出した修士論文「関西パイプオルガン文化の定着」をベースに、1910 年代から 1940 年代の関西におけるパイプオルガン受容を「外国人自身の礼拝」「宣教の道具」「女子教育の道具」という 3 つの目的から分類および検証したものである。神戸ユニオン教会や京都聖マリア教会、同志社女子大学などの具体例を通じ、当時は各コミュニティや宗教宗派ごとに独立した情報流通ルートが存在し、それが関西の多様なオルガン受容の土台となった可能性が示された。また、1983 年の神戸松蔭女子学院大学の事例以降、関西では特徴的な仕様を持つ「歴史的オルガン」が先行して導入される傾向にあることも併せて指摘された。

質疑応答では、提示された事例を今後の研究へどう発展させるかについて、フロアを交えた具体的な議論が展開された。まず、紹介された各楽器の流通の側面、つまり「誰が誰に発注し、どこから移入されたか」という点について質問があがった。これに対し発表者は、戦災による史料消失の難しさに触れつつも、一部の教会では記録が現存していることを回答した。

さらにフロアからは、近年盛んなピアノの流通史研究を例に挙げ、「流通」という客観的事実と、史料にみられる「豊かな礼拝を守る」といったパイプオルガンの設置の理念という、双方の側面からアプローチすることの有効性が提言された。国内の史料が焼失していても、アメリカやドイツなど海外の製作者（オルガンビルダー）側に製造番号や発注の記録が残されている可能性が極めて高いことが示され、海外史料の発掘という具体的な手法が提案された。同時に、今後はプロテスタントやカトリックといった宗派による礼拝形態の違いを精査し、それぞれの礼拝目的に即したオルガンの役割を分類および検討すべきであるという、研究枠組みにおける指摘もあった。これらに対し発表者は、実際に神戸聖公会に関する海外の製作者側の資料の手がかりを近年発見し、今後の調査を模索している段階であると応じた。また、日本のオルガン導入は 1980 年代以降、礼拝の目的に応じた楽器選びへと集約されていったという見方を示し、宗派ごとの詳細な違いについても今後の課題として取り組む意向を示した。

質疑応答を通じて、海外ビルダー側の記録追跡による流通史の構築や宗派ごとの礼拝形態との相関性の検証という明確な方向性が提示された。今後は言説分析に留まらず、国内外の一次史料をクロスオーバーさせることで、関西のパイプオルガン受容の独自性がより実証的に解明されるだろう。

博士論文発表

多文化影響下における青島での音楽活動と歴史的背景の考察——1938-1945 を中心に

李雅心

発表者による要旨

李雅心

本研究は、青島における音楽文化の形成と変容を、1938 年-1945 年を中心に考察するものである。青島はドイツ、日本、中国という複数の支配体制を経験する中で、西洋音楽、日本音楽、中国伝統音楽が交錯する独自の音楽文化を形成してきた。特に戦時下において、音楽は文化政策や教育の手段として利用される一方、市民や音楽家は受容・適応・再解釈を通じて主体的な音楽活動を展開した。本研究では、日本・中国・ドイツの公文書、新聞、演奏会資料、口述史を用い、占領下の音楽活動とその社会的役割を実証的に分析する。また、ドイツ租借期に導入された西洋音楽文化が、後の青島の音楽的基盤となった点にも注目する。音楽を多文化的交錯と地域社会の主体性を映し出す実践として捉えることで、東アジア音楽文化史に新たな視座を提示する。

レポーターによる報告

陳諾

19 世紀末以降の青島は、植民地支配のもとで近代化が進められた中国の重要都市の一つである。しかし、複数の西洋諸国が入り混じっていた上海や天津のような租界都市とは異なり、青島はドイツおよび日本による単独支配を相次いで受けた。そのため、近代青島には、宗主国の権力が強く作用する高圧的な政治的・社会的風土が形成された。この状況をポストコロニアルな視点から捉えるならば、植民地時代の青島市民による植民者への文化的アイデンティティの表出は、しばしば強制性を帯びたものであったと考えられる。音楽文化もまた、その例外ではなかった。

ドイツ占領期（1897-1914）には、「模範植民地」という構想のもと、教会・学校・軍隊・サロンなどの多元的な媒体を通じて、西洋音楽が初めて現地社会に導入・受容されていった。また、日本占領期（1914-1922 および 1937-1945）には、日本政府がドイツ占領期に形成された西洋文化の基盤を利用し、「大東亜共栄圏」のイデオロギーを地域社会の日常的な西洋音楽活動へ浸透させた。李雅心氏の発表は、自身の博士論文（2025 年度）に基づき、以上の社会的コンテクストを背景とした青島における音楽実践の実態を明らかにするものである。とりわけ、第二次日本占領期（1937-1945）において、高圧的な文化政策に直面した青島の地域社会に見られる能動的な文化受容戦略を解明することが、本論文の眼目であった。

質疑応答では、まず、学位論文で十分に扱われていなかった青島の主権返還期（1922-1937）における伝統文化実践について質問が寄せられた。ドイツと日本による直接的な植民地支配を免れたこの時期の社会状況は、後の第二次日本占領期における地域社会の文化受容戦略にも少なからぬ影響を与えたと考えられる。これに関連して、青島の西洋音楽における中国音楽の旋律的特徴の受容や、西洋古典作品の受容の有無について問いが提出された。これに対して、ドイツ占領期において、中国的な旋律が創作に活用された事例があり、伝統音楽と西洋音楽が同じプログラムで演奏された記録も残されているという言及がなされた。また、西洋古典作品については、植民者の軍隊や政府機関がオペラや管弦楽の中心的な発信地であったものの、日本占領期以降はオーケストラが長続きしなかったと補足された。この研究を起点として、青島にとどまらず、地域社会における植民地モダニティ形成の実態解明が進むことを期待したい。

研究発表

歌の「イリュージョン」——エレヌ・ド・モンジュールの
『フォルテ・ピアノの教育のための完全な教程』における美学的背景と手段

藤田真優

発表者による要旨

藤田真優

本発表は、エレヌ・ド・モンジュール Hélène de. Montgeroult (1764・1836) のピアノ教本 (1820 年刊) における「イリュージョン (illusion)」概念の美学的背景と演奏技術への適用を明らかにするものである。モンジュールはこの概念を、減衰するピアノの響きが持続しているかのように錯覚させることと捉え、その具体的方法を提示している。しかしこの用語の導入は、単なる音響上の錯覚のみならず、聴き手に対する感情喚起という美学的概念にも基づいていた。彼女は、演奏者が個人的感情を抑制し、コントロールされた技によって演奏することを重視しており、その原理は 18 世紀後半の演劇論と通底する。本発表では、「イリュージョン」概念を通じて、モンジュールが音の減衰という楽器の「欠点」を補いながら、ピアノ固有の演奏技法の拡張に寄与したことを示す。

レポーターによる報告

松井典子

藤田氏により、フランスのピアニスト兼作曲家エレヌ・ド・モンジュールの演奏美学に関する発表が行われた。研究対象は、彼女が 1820 年に出版した全 3 巻、700 ページを超える大著『フォルテ・ピアノ教育のための完全な教程』である。

本作の最大の特徴は、ピアノという楽器において「歌っているように聞こえさせること」を最重要視し、それを歌の「イリュージョン」と言い表した点にある。打鍵後に音が減衰していくピアノが、当時はまだ不完全な楽器と見なされていた時代、いかにして歌唱を模倣するかはピアニストたちの共通の課題であった。モンジュールの説く「イリュージョン」には、この物理的な欠点を演奏技術によって補い、音が持続しているかのように耳を欺く音響上の錯覚という意味がある。それと同時に、作品の持つ感情へと聴き手を没入させる表現上の効果という、二重の意図が込められていることが明らかにされた。

発表者は、この「イリュージョン」を実現する原理として、ディドロの演劇論における「イリュージョン」との類似性を指摘した。ディドロは、「俳優は感情に溺れず、冷静な技によって演じるべきだ」と説いたが、モンジュールも同様に「真の才能による表現はすべて理性的に統制されなければならない」と主張した。具体的な手段としては、旋律の減衰を隠すための伴奏の強弱によるコントロール、音の空白を埋める装飾音、伴奏のテンポを一定に保つテンポ・ルバート、鍵盤上で指を滑らせる独自の運指法などが挙げられる。このように、本来は感覚的な「歌」の表現を、極めて論理的な記述へと落とし込んでいる点に彼女の教本の特徴がある。

発表後の質疑応答では、フロアから多角的な質問が寄せられ、モンジュールの歴史的な位置付けをめぐる議論が深まった。まず、演劇論との繋がりについては、当時の演奏家が自らを俳優になぞらえることは一般的であり、作品と受容者を媒介する存在としての類似性は高いとの認識が示された。また、特徴的な運指法については、同じ鍵盤上で音を打ち直さずに指を滑らせて音をつなぐ技術であり、モンジュール自身のオルガン演奏経験が影響している可能性が指摘された。さらに、感情のコントロールに関しては、感情の完全な排除ではなく、あくまで主観に溺れることを排した「統制」こそが重要であり、作品固有の性格（キャラクター）を表現するために自制が求められたのだと補足された。

とりわけ、結論で言及されたショパンとの関係性をめぐっては、フロアから「ショパンは当時のロマン主義的な美学に対して必ずしも肯定的ではなく、むしろ 18 世紀的な古典の演奏観や貴族的なサロン文化を強く継承していたのではないか」という重要な視点が提示された。これに対し発表者は、モンジュールの独自性が、18 世紀的な美学を保ちながらも次世代のピアノ技法を開拓および体系化した連続性にあることを改めて強調した。その上で、ショパンもまた 18 世紀的な基盤の上に独自の表現を築いた存在であると述べ、両者はピアノ音楽史における 18 世紀と 19 世紀をつなぐ架け橋として、きわめて近い位置にあるとの考えを述べた。

本報告は、19 世紀初頭のピアニストが、ピアノ特有の音の減衰を「技」で補い、いかにして歌の理想を実現しようとしたかを明らかにした。このように、18 世紀から 19 世紀にかけての教授法の連続性を浮き彫りにした試みは、現代の演奏においても重要な視点を提供するものであり、ピアノ演奏における「歌う」表現について改めて考察する上で、多くの示唆を与えるものであった。

■西日本支部 第 69 回（通算 419 回）定例研究会

日 時 : 2026 年 7 月 18 日（土）14:00-17:30
会 場 : 九州大学大橋キャンパス 2 階 322 教室（ハイブリッド方式）
例会担当 : 西田絃子（九州大学）
司 会 : 小川将也（九州大学）
内 容 : 卒業論文発表・修士論文発表・博士論文発表・研究発表

卒業論文発表

楽曲と演奏者の感情不一致が及ぼす聴取者の感情評価への影響

坂崎達哉・西田絃子

発表者による要旨

坂崎達哉・西田絃子

本研究は、楽曲が表現する感情と演奏者の身体表現に表出されている感情が一致する条件と、意図的に不一致にさせた条件を比較することにより、その矛盾が聴衆の演奏全体の感情解釈に与える影響を明らかにすることを目的とした。参加者 40 名を対象に、ピアノ演奏の映像と音源を組み合わせで作成した 2 つの感情の一致・不一致条件の刺激を提示し、感情語を用いたリッカート尺度による感情評価をさせた結果、聴覚情報の優位性を基本としつつも、不一致条件では視覚情報が評価を映像感情側へ引き寄せる微細なバイアスとして機能することを確認した。この干渉の強さは楽曲の構造的特徴に依存している可能性も考えられる。

レポーターによる報告

高橋舞

本発表は、楽曲から知覚される感情と演奏者の身体表現に表れる感情との一致・不一致が、聴取者の感情評価にどのような影響を及ぼすかを検討する試みである。音楽鑑賞を聴覚のみならず、演奏者の身体動作を含む多感覚的な体験として捉えた点が特徴的である。研究では、事前調査によって「幸せ」「怒り」「悲しみ」を表すピアノ曲を各二曲選び、一名のピアニストに、各曲において三種の感情をそれぞれ表現するよう依頼し、その演奏を撮影した。さらに無音映像についても感情評価を行ったうえで、選定した映像に既存の音源を組み合わせた動画を作成し、聴取者による評価を行った。その結果、全体としては聴覚情報が優位である一方、不一致条件では、身体表現が聴取者の感情評価に影響を与える場合があり、その作用は楽曲および聴取者の音楽経験によって異なる可能性が示された。

発表時には、研究対象とした 6 曲の選定理由と、映像では演奏者による音源とは異なる既存の音源が用いられたことが、質疑において確認された。卒業論文によれば、当初はバッハ《平均律クラヴィーア曲集》第 1 巻の作品で統一する予定であったが、同作品内で「怒り」の感情を想起させる楽曲の選定が困難であったため、作曲家による制限を設けず選曲したという。事前調査の結果、「怒り」の楽曲としてベートーヴェンのピアノ・ソナタ第 14 番「月光」Op. 27-2 第 3 楽章が選ばれ、さらに追加調査を経てバルトークの《アレグロ・バルバロ》Sz. 49 が参考値として採用された。

一方で、「幸せ」と「悲しみ」がバッハ作品であるのに対し、「怒り」の 2 作品は作曲家が異なり、また演奏テンポが速く、強いダイナミクスやアクセントを伴うことから、一般的には演奏に伴う身体運動も異なってくる。感情表現と楽曲固有の特徴を切り分けるには、同一作曲家の作品、あるいはテンポ感や身体運動の近い作品を用いる方法も考えられたのではないかと。また、音源は《アレグロ・バルバロ》のみバラーシュ・ソコライ Balázs Szokolay による演奏で、それ以外はアンドラーシュ・シフ András Schiff の演奏が用いられており、演奏者の条件が異なる。さらに、映像で演奏しているピアニストの音源ではなく既存の音源を組み合わせる以上、参加者から映像と音源のずれについて明示的な指摘がなかったとしても、微細なずれの影響を完全に排除することは難しい。論文でも今後の課題として、撮影時に録音したピアニスト自身の音源を使用した場合との比較検証が挙げられている。こうした条件をさらに統制することで、演奏者の身体表現が聴取者の感情評価にどのように関与するのか、より明確な知見が得られるであろう。非常に興味深い研究であり、今後の進展が期待される。

卒業論文発表

計算音楽学による日本を題材としたゲームの背景音楽の特徴分析

齊田虎大

発表者による要旨

齊田虎大

日本を題材としたゲーム作品は近年世界的な人気を獲得している。一方で、その背景音楽がどのように日本を表現しているか分析した先行研究はほぼない。そこで、本研究では日本を題材としたゲーム作品の背景音楽について、計算音楽学によるコーパス分析を用いてその音楽的特徴を明らかにすることを目的とする。本分析は 13 作品から選定された 105 曲について、その調、拍子、bpm、使用楽器、音響効果、音楽的特徴をタグとして羅列し、さらに旋律の音階構造と演奏楽器について記述分析を行った。その結果、日本を題材とするゲームの背景音楽として、(1)日本伝統楽器の使用、(2)五音短音階旋律、(3)打楽器に付加された強いリバーブの三つの音楽的特徴が明らかになった。

レポーターによる報告

大瀧徹

本発表は、日本を題材とするゲーム作品の背景音楽を対象に、計算音楽学的手法によって「日本らしさ」を構成する音楽的特徴を検討するものであった。2006 年以降に発売された 13 作品から 105 曲を取り上げ、使用楽器、音階構造、拍子、BPM、音響効果などをタグ化したうえで、共起分析や PMI（相互情報量）を用いて、それらの結びつきを分析した。

分析からは、日本伝統楽器の使用、五音音階による旋律、打楽器に付加された強いリバーブという三つの特徴が確認された。日本伝統楽器は 105 曲中 98 曲で使用され、そのうち 97 曲では複数の楽器が併用されていた。音階については、ニロ抜き短音階が場面を問わず広く用いられるのに対し、ヨナ抜き短音階は戦闘場面、ヨナ抜き長音階は非戦闘場面に多いという違いがみられた。琴と尺八、太鼓と男性の掛け声といった組み合わせも特徴的であった。加えて、尺八や横笛では独奏、琴では伴奏や対旋律への関与が多いなど、楽器ごとの用法にも違いが認められた。発表では、こうした結果から、宮城道雄以降の箏曲、小泉文夫の音階論、小泉八雲の著作などの影響関係が論じられた。

質疑では、まず分析対象となった 13 作品が無作為に選ばれたものではないため、その結果を「日本を題材とするゲーム一般」の特徴へと広げることには慎重であるべきとの指摘があった。また、「影響」という表現については、作曲者の証言などによって裏づけられる事例と、音楽的な類似から推測される事例とを区別する必要があるとの意見が出された。さらに、タグ付けが分析者の判断に依存する点を踏まえ、今後は楽器名だけでなく、音色や響きそのものを数値化する方法も検討できるのではないかと提案がなされた。質疑において示された指摘は、本研究の今後の展開を考えるうえで重要であったように思う。統計上の妥当性はもちろん、タグ付けに用いる分類項目の改良に関する指摘は、分析手法をさらに洗練させる可能性を示すものであった。また、「影響」の扱いをめぐる議論は、計量的分析だけでは捉えきれない制作過程や、音楽的手法が定着していく歴史的・文化的文脈を、他の方法と接続しながら検討する必要性を示唆していた。

修士論文発表

高千穂の夜神楽にみる自然観の現れ

田中晴野

発表者による要旨

田中晴野

本研究は「エコミュージコロジー」の視座を用い、高千穂の夜神楽における自然観の表象と継承を考察したものである。文献調査と関係者への取材を通じ、神楽の実践が現代において持つ意味を多角的に分析した。その結果、山岳や農耕を主題とする舞はアニミズム的感性に基づき、自然との交渉を試みる実践であることが確認された。祭場の構成や楽器の性質から、神楽と地域の風土と不可分性を読み取ることができた。また、観光化は外部者へ伝統的な自然感覚を翻訳し、保存の基盤を支えていることが明らかになった。高千穂の夜神楽は、人間が土地と共に生きるための指針を提供する機会として、環境問題が深刻化する現代において重要な意義を持つ。

レポーターによる報告

川崎瑞穂

本研究は、エコミュージコロジーの視点から高千穂の夜神楽における自然観を考察し、日本におけるエコミュージコロジー研究の展開可能性を探ろうとする意欲的な試みであった。まず先行研究を整理し、日本への応用事例がまだ多くないことを指摘した上で、高千穂の夜神楽を事例として分析を進めていた。発表では、高千穂の地理的環境や夜神楽の歴史、観光神楽の成立過程などが概説され、さらに、五行思想や水の重要性と地域環境との関係、演目内容と農耕との結びつきなどを通して、神楽とその地域の風土や信仰との関連が論じられた。また、笛が地域で手作りされるため一本ごとに音高が異なることや、材料が環境や社会状況の変化に応じて変化してきたことなど、自然環境と楽器との関係にも着目していた。さらに、観光神楽の拝観料が保存活動の財源となっていることや、「一夜氏子」のように観光客を共同体へ迎え入れる仕組みについても紹介され、自然だけでなく当該社会との関係にも目配りした内容となっていた。

一方で、本研究を「エコミュージコロジー」と位置づけることについては、やや慎重に考える必要があるようにも感じられた。発表や質疑応答を通じて示された内容は、音楽を地域の自然環境や生活環境との関係の中で理解しようとするものであったが、このような視点自体は民族音楽学・音楽人類学において従来から重視されてきた基本的なアプローチでもある。そのため、方法論としてエコミュージコロジーを導入することでどのような新たな視角や分析が可能になるのかについては、もう一步踏み込んだ議論が示されれば、研究の独自性がより明確になったように思われた。むしろ今回示された笛の製作や音高の地域差に関する分析などは非常に興味深く、こうした具体的なフィールドワークに基づく音響的・物質的な研究をさらに掘り下げることで、日本の民俗芸能研究や音楽学に対して大きな貢献となるのではないかと感じた。

質疑応答ではいくつかの質問があった。例えば、「神楽には全国的・地域横断的に共通する演目や構成が数多く存在するため、高千穂に見られる自然観と考えたものが、実際には神楽というジャンル全体に共通する表現である可能性をどのように区別するのか」という質問が出された。これに対して発表者は、九州地方に共通する神楽歌などは存在するものの、地域ごとの変化や差異に着目していると回答していた。この点は重要な論点であり、むしろ共通するフォーマットが地域ごとにどのように変容し、その土地固有の自然観や信仰を反映するようになったのかという視点から比較研究を進めることで、本研究の主張はより説得力を増すのではないかと感じた。

博士論文発表

戦後日本における山田耕筰の歴史的記憶——人物像と《赤とんぼ》を中心に

梶大也

発表者による要旨

梶大也

発表者の博士論文「戦後日本における山田耕筰の歴史的記憶——人物像と《赤とんぼ》を中心に」は、戦後日本の人々が山田耕筰（1886・1965）をどのように理解し、表象し、叙述してきたか的一端を明らかにすることを目的としたものである。そのために前半では、山田に関する叙述について1960年代の小島美子によるものなどに遡り、人物像の形成と展開を検討した。続く後半では山田の代表作の一つとされる《赤とんぼ》について、砂川闘争を中心とした政治運動や映画に用いられた同曲の表象を検討した。これら二つに見られる山田と戦争との関わりにまつわる叙述、表象といった要素を踏まえ、彼を通じた戦時期の忘却という現象を指摘した。

レポーターによる報告

李惠平

本発表では、発表者の梶大也氏が2026年に九州大学に提出した同題の博士論文の概要が紹介されるとともに、氏の研究上の動機や今後の方向性が補足され、山田耕筰の人物像を扱う第1部を中心に報告が進められた。

山田耕筰を題目に掲げながら、発表者は冒頭、本研究には山田その人を対象としない部分が含まれ、必ずしも山田耕筰研究ではないと断った。むしろ、氏の一貫した関心は、「近現代の日本または日本人は西洋音楽に対して何を期待していたのかという想念の問題」にある。本研究は、戦後の山田像と《赤とんぼ》をめぐるイメージの成立と変遷を検証することで、その一側面を明らかにしようとするものである。また、多様な文字資料のみならず、テレビ番組や映画などの映像資料も検討対象に含める点は、本研究の大きな特色の一つであろう。

発表者の言を借りれば、本研究の目的は、戦後日本の人々がどのように山田を理解・表象・叙述してきたかの一端を明らかにすることであり、それを踏まえて、戦後日本の音楽史叙述を再検討するための基盤を築くことである。その結論は、戦後の山田像が変化していくなかで、山田の戦争協力がしばしば等閑視され、あるいは美談化されるとともに、戦後、「良い」音楽とされた《赤とんぼ》が好意的に受容された結果、戦後日本の音楽をめぐる言説空間に「山田を通じた戦時期の忘却」が生じた、というものと要約できよう。

したがって、明言されてはいないものの、本研究が通常受容史の枠組みを越え、より高次の水準で「受容の受容史」を試みる点は、従来の研究との最大の相違点であろう。その根底には、良心的知識人としての氏の姿勢を見いだすこともでき、その点も称賛に値する。

質疑応答では、今後の方向性や、1980年代以降に形成された山田像に関する質問があり、とりわけ小島美子の山田論に関するものが複数寄せられた。そこで考えさせられたのは、本研究が典型的な山田研究ではないとしても、小島の山田論やテレビ番組における発言をたどる作業は、それ自体がすでに一つの「小島研究」として成立しており、戦後知識人の置かれた状況や、日本における音楽知の形成史の一端を照らし出しているのではないかと、いう点である。実証に用いる資料に限られるなか、この点については、同時代の社会的・知的文脈を踏まえた氏自身の歴史解釈に、さらに踏み込んでほしかった。また、本研究は戦後日本の音楽史叙述の再検討を目指す、ここでいう「戦後日本の音楽史叙述」が具体的に何を指し、本研究がどのように既存の音楽史叙述と接続するのかについて、より明確な説明が望まれる。いずれにせよ、氏の研究は大きな可能性を秘めており、さらなる展開に期待したい。

研究発表

旧制第七高等学校教師エルンスト・プツェルの音楽教育観とナチス・ドイツの音楽政策

梅林郁子

発表者による要旨

梅林郁子

本発表は、旧制第七高等学校造士館にドイツ語教師として赴任したエルンスト・プツェル Ernst Putscher (1896 - 1962) の音楽教育観を、ナチス・ドイツの音楽政策との関係から検討するものである。プツェルは語学教師でありながら、滞日中に演奏・作曲活動を行い、日本の音楽界と深く関わった。また、音楽教育誌に定期的に寄稿した論考においては、当時のドイツ・ナショナリズムの公式路線に従い、ナチス政権下の音楽教育制度を肯定的に紹介するとともに、ヒトラー・ユーゲントの音楽教育を国民統合の手段として評価している。本発表の事例を通して、滞日外国人が戦時下日本において果たした音楽的役割の一端が明らかにできると考える。

レポーターによる報告

田崎直美

本発表は、ナチスがドイツで政権を掌握し、第二次世界大戦へと突入した1930年代～1940年代初頭、滞日ドイツ人が本国のナチスの音楽政策からどのような影響を受けていたのかを、旧制第七高等学校造士館（鹿児島大学の母体・前身校の一つ）のドイツ語教師エルンスト・プツェル (1896 - 1962) の事例から検討した研究である。プツェルは滞日中、作曲・演奏やピアノ教育に携わり、宮城道雄と共演するなど日本の音楽界とも深く関わったが、学術的な先行研究はない。そこで発表者は、鹿児島大学所蔵の関連史料と、プツェルが日本の音楽教育雑誌へ寄稿した論考を中心に検証を行っている。

来鹿（1928年）当初、プツェルはナチスに距離を置く発言をしていたが、国家社会主義教師連盟（NSLB）によって国外派遣教師に諜報活動が義務付けられたためか、次第にナチスに協力的な姿勢へと変化し、日独防共協定（1936年）以降はその音楽政策を肯定的に評価するようになった。『音楽教育研究』（1939年10月刊行、のち誌名を『音楽教育』に変えて1943年5月号まで継続）に寄稿した13本の記事のうち7本には、ナチス・ドイツの帝国音楽院の方針への共鳴が認められるという。具体的には、ヒトラー体制を芸術・文化の「浄化」「開放」として肯定し、ナチスの民族観・国家観を音楽史解釈に反映させ、ユダヤ人音楽家を否定的に評価する姿勢などである。また、1936年以降にドイツ国家唯一の公式青少年団体となり若者の参加が義務化されたヒトラー・ユーゲントの音楽教育について、本国の娘から届く手紙をもとに具体的な活動例を紹介していた。発表者は、こうした滞日ドイツ人音楽家がナチスの音楽政策を日本に伝え、日本の音楽政策に「模範」を示す役割を果たした可能性を指摘した。

質疑では、他誌への寄稿の有無や寄稿の経緯、雑誌の発行部数・読者層・反応など、論考の背景をめぐる質問のほか、プツェルの作曲・演奏活動や音楽教育、妻の役割、本国の政治状況が日本へ伝わる速度など

について、活発に議論された。回答からは、滞日ドイツ人が夏に軽井沢へ集められ、本国について教育を受けていたことや、ナチス宣伝を行わなかったドイツ人もいたことが示され、興味深かった。プッチェルの場合、ひとところに長く滞在した外国人・音楽家として貴重な例だという。今後の研究の発展が期待される。

□ 編集後記 □

『西日本支部通信』第 29 号（電子版）をお届けいたします。今号には、二回の定例研究会（第 68 回と第 69 回）の発表要旨と報告が収録されています。要旨や報告をお寄せいただいた発表者とレポーターの皆様に、厚く御礼を申し上げます。また、前年度より引き続き編集幹事をお願いしている西澤忠志さんには、その有能な働きぶりに感謝しております。

さて、懸案であった日本音楽学会西日本支部メーリングリスト（msj-k）につきまして、とうとう運用を停止させました。筆者は個人的に、2001 年度のト田隆嗣支部長時代から数年のあいだ、関西支部の IT 幹事としてメーリングリストの管理人をつとめました。まさか自分が終わらせることになるとは思ってもみませんでした。ここで展開された議論や情報交換は、アーカイブしておくほどのものではありませんでしたが、当時のコミュニケーションの熱量を示したものがこの世からなくなること、多少の感傷を禁じえません。

ところで、第 27 号と第 28 号の支部通信におきまして、日本音楽学会のウェブサイトの URL や本部事務局のメールアドレス、その他のコンテンツについて、誤った情報を掲載しておりました。支部通信の読者と関係者にはお詫びを申し上げます。今号から修正しておりますので、あらためてご確認いただければ幸いです。（I）

FILE 西日本支部通信

年に 2 回、PDF で発行され、西日本支部のホームページより随時閲覧可能です。個々のご事情で、紙面版の送付をご希望の会員は支部事務局にご相談ください。

MAIL 日本音楽学会 Information Mail

学会本部より毎月 1 回、各支部の例会、音楽関係学術イベント開催助成金など、多様な情報が送信されています。登録をご希望の方は、日本音楽学会のウェブサイトからこの 4 月に導入された会員管理システム「スマートコア」にログインし、ご自身のプロフィールの設定にて「インフォメーションメール配信希望」にチェックを入れてください。

日本音楽学会西日本支部メーリングリスト（msj-k）

こちらのサービスは2026年3月に終了しました。ここ数年は利用がなく、また停止の予告に対して継続を希望する声も寄せられなかったため、その役目を終えたと判断しました。2008年度からGoogle Groupsというサービスにて運用していましたが、別のサービスで運用していたその前やその前の前まで含めると、かれこれ三十年以上利用されてきた情報共有メディアでした。長らくのご利用に感謝します。後継のサービスはありませんが、学会本部によるInformation Mailには、会員同士で情報共有ができるスペースがありますので、そちらをご利用ください。

WEBSITE 日本音楽学会 <https://www.musicology.jp/>

日本音楽学会西日本支部 <https://msj-west.com/>

当通信へのご意見・ご質問、ならびに原稿掲載のご希望がございましたら、編集担当委員までご連絡（連絡先は末尾に記載）ください。あわせて、本部・支部の事務局等に宛てて原稿をたまわる折、PC の記号の使い方について、以下ご参考くださいますと幸いです。

- ・ 以下の記号は、ウェブサイト上で適切に表示されない場合があります。

文字内の補助記号（ウムラウトやアクセントなど） / 半角カタカナ

文字装飾（丸付き文字や全角データとしてのローマ数字）

- ・ 文中に傍点や書式設定（ゴシック・イタリックなど）の設定をなさりたい場合は、メール本文でなく、Microsoft Word のファイルに記入して、メールに添付してください。

日本音楽学会『西日本支部通信』第29号

発行者：日本音楽学会西日本支部

事務局：小石かつら（西日本支部長）

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155 関西学院大学文学部美学研究室気付

E-Mail: msjwest00@gmail.com TEL: 0798-54-6212

編集者：今田健太郎（2026年度編集委員）

〒583-8501 大阪府羽曳野市学園前3-2-1 四天王寺大学文学部

E-Mail: imada_ke@ta.rdy.jp